
恋姫無双～外史に降り立った悪魔狩人～

オルフェ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋姫無双〜外史に降り立った悪魔狩人〜

【Nコード】

N9898X

【作者名】

オルフェ

【あらすじ】

ある日、突然のダンテに呼ばれ悪魔関係の依頼だと言うので嫌々ながらもDevil May Cryに呼び出されネロは駆けつける。

そこには古ぼけた鏡があり驚きの内容を語り出す…。

プロローグ（前書き）

ダンテやネロの口調の再現がかなり難しい…ご都合主義で恥ずかしい稚拙な文章で原作無視のオリジナルストーリーになってしまいかもしれません初めての投稿なのでどうかご容赦を…。

あゝ、マジで文才がない…。

ちなみに一刀は出ない予定です。

プロローグ

ネロ「アンタの話が本当なら、この骨董品の鏡が依頼をしたって言うのか？それも合言葉ありで」

“ Devil May Cry ” に突然呼び出されたネロは酷く機嫌が悪かった

ダンテ「ドラッグはやってないぜwほら、坊やにもちゃんと言いな」

『はっ、はい！伝説の魔剣士の血を継ぐ者よ！私達の世界を…外史を…救ってください！』

古ぼけた鏡が突然、光出したと同時に話し出した

ネロ「みたいだな…、悪魔絡みの依頼ってことはわかった。それで『私達の世界』ってのはどういうことだ」

『私達の世界“ 外史 ” は中国の三國志の武将が可愛い美少女だったら…以下省略』

ネロ「三國志か…、たしかクレドが好きで良く読んでたな」

ネロは、ほんの少しだけ寂しそうな顔をする

ダンテ「Ha！要するに過去でパラレルワールドで可愛い子ちゃんいっぱいの世界ってことか！Chinaに行くのも初めてだ！」

対照的にダンテは子供ようにはしゃいでいる

『依頼を受けて頂けますか？報酬は貴方達が望む物を差し上げます』

ダンテ「こんな楽しそうな依頼は受けない訳にはいかないぜ！報酬はピザとストロベリーサンデーを一年分だ」

即答だった：借金をチャラにするとかいろいろあるだろダンテ：〇

r z

ネロ「図々しいことは百も承知だけどフォルトウナの孤児院のガキ達の誕生日とクリスマスにプレゼントを頼めるか？キリエはガキが笑ってと本当に嬉しそうに笑うから：な」

ネロは頭を掻きながら少し頬を少し赤くして答えた

『失礼ですが：たったそれだけでいいのですか：？』

ダンテ「ガキの頃からの夢だったファンタジーの世界に行けて報酬は大好物一年分、貰いすぎなくらいだw」

ネロ「あんたにとっちゃ下らないかもしれないけど俺にとっての一番だ。」

『しかし、それだけでは私の気がすまないと言うか：なんと言うか……』

ダンテ「アゝ、って言われてもなあ……」

ネロ「じゃあ弾丸の補充頼めるか：？大昔だから銃なんてないだろうし、こっちから持っていくにしても限りがあるしな」

『いくら射っても弾切れしないようにすればいいのですね？チチン
パイパイナンチャラカンチャラ…はい！これで無限に射てるよう
になっているでしょう』

ダンテ「ハッハー！マジでファンタジーだぜ！」

ネロ「ハハハ、マジか…便利な力だな……。まあいい、仕事をしに
行くか」

『それでは私の力で貴方達を外史に送ります。鏡の光に飛び込んで
ください…』

ダンテ・ネロ「OK」

『最後に一つお訪ねします…なぜ、私を信じてくれたのですか？罨
の危険もあったというのに』

ネロ「最初は正直言って疑った…だが、俺の勘がアンタが嘘を言っ
てないってからな、先行くぜ」

ネロがぶつきらぼうに言い放ち光に飛び込んだ

ダンテ「まっ、仮に罨だったとしても関係ない」

ニヤリとニヒルに笑ったダンテが言い放つ

『それはどうい…』

ダンテ「刺激があるから人生は楽しい、そうだろ」

そう言い残し光に飛び込んだ

『誇り高き魔剣士の血を継ぐ者よ…どうか御武運を』

こうして誇り高き魔剣士の血を継ぐ者が二人のデビルハンター（悪魔狩人）が外史に降り立った

プロローグ（後書き）

ダンテやネロの使ってほしい台詞を募集します。
自信ないですけどリクエストには答えたいです…頑張ります

三人の少女（前書き）

うくん、難しいです。

自分の文才の無さに泣いてくる…orz
ダンテは次回、登場予定です。

三人の少女

ネロは眩しい光を感じて目を覚ました。

起き上がり辺りを見渡すと、なにもない荒野、どこまでも広がっている。錯覚するほどの荒野であった。

「しけたところだぜ：ダンテは気にするだけ無駄だなダンテだし。」

一言呟き溜め息をつき、今の状況を整理しようとしたとき自分に向けられている視線に気づいた。

「コソコソ覗いてないで用があるなら顔見せな」

ネロはホルスターから取り出したブルーローズを左手に構え、眉間に皺を寄せながら不機嫌そうに荒野にある大きな岩に問う。

「あ、あはは。バレてました？右手：怪我してるんですか？」

桃色の髪をしたチョット天然そうな少女が苦笑いしたあとギブスで吊られたネロの右腕を見て心配そうな顔で問う。

「怪我してるわけじゃない、でも俺の右手はあんまり人に見せたくなくてな：心配してくれてありがとよ」

ネロは桃色の髪の少女の目を真っ直ぐ見て答え、ブルーローズをホルスターに収めた。

「いえいえ！お礼を言われることなんてなにもしてませんし！／＼

手を顔の前でブンブン振りながら照れながら否定する。

「俺に敵意はない、悪いな余計な気を使わせちゃまって」

桃色の髪の少女は全く気づいていないが、後ろにいる美しい黒髪の長刀を持つ少女と巨大な矛を背負った女の子は、ネロに敵意がないことが解ると構えていた武器をおろした。

「見たことない服に変な鉄の筒、変なお兄ちゃんなのだ！」

「コラッ、鈴々！初対面の人に向かって失礼だぞ！すみません…ゴホン、私は姓は関、名は羽、字は雲長と申します」

「私は姓は劉、名は備、字は玄德だよ！よろしく♪」

「鈴々は姓は張、名は飛、字は翼徳なのだ」

「姓も字もない、名はネロ、ここから遠く離れた西のフォルトウナって国から来た便利屋だ、仕事の依頼があつてさっきここに着いたばかりだ。よろしくな、劉備、関羽、張飛…でいいか？」

「はい♪ネロさんの国では姓や字がないのが普通なんですか？」

「姓はあるやつもいる字ってのはない、それと俺は孤児院育ちだから姓が仮にあったとしても知らねえ」

「えっ、ごめんなさい…！」

ガバッ！つと頭を下げて劉備という少女が謝る。

「気にするな。それで、あんた達はなんでこんななんもない所にいたんだ？」

「私が説明します。私達はこの乱世を鎮めるために旅をしているのです。そして菅路という占い師が人の世を救いし伝説の魔剣士が天より参られるという予言を出し、それを探しているのです」

「伝説の魔剣士？」

関羽の話に劉備は続ける。

「でも、なかなか見つからないんですよ！わかってるのは身の丈程のでっかい黒い骸骨の剣と細い片刃の剣を持つてるってことだけで…、最初はネロさんかと思ったんですけどネロさんの剣は骸骨の剣じゃないし…はあ」

「残念だったな…（骸骨の剣はダンテのリベリオン、細い片刃の剣は俺の閻魔刀のことか？）」

「鈴々は疲れたのだろ！魔剣士なんてお伽噺の棲羽亜陀くらいしかないのだ！本当にいるわけないのだ！」

「鈴々、弱音を吐くな！きつ々というと思う…」

（スパードの伝説まであるのか、ダンテが知ったら苦虫を噛み潰したような顔するんだろうな）とネロは心の中で思った。

つと、三人がネガティブオーラ全開で撒き散らし始めたのでネロは話題を変えた。

「さっき違う名前で呼びあってたけみたいだが、あだ名みたいなもんか？」

「あだ名じゃなくて真名ですよ♪あつ、真名は両親や親族の人に貰うから…」

「いや、俺の国にはマナ？なんてもんは元々ない」

「姓や字だけじゃなくて真名もないのだ？変な国なのだ！ビックリなのだ！」

「それは真名と言って親しい間柄でしか呼ぶことの出来ない神聖な真の名のことで、親しくない人が許可を得ず、勝手に呼んだりしたら殺されたりしても文句は言えないのです」

「OK、参考になった。真名ってやつで話しかけてブツ殺されなくてよかったぜ（殺される気はないけど）」

肩をすくめ、苦笑しながらネロが答える。

この時、ネロは心の中で思った。

（女運の悪さSSSのダンテなら間違いなく真名で呼ぶ、あげく挑発しまくって事態をややこしくするな。）

ネロが心の中で思ったことは、直後に現実にかかることになる…。

赤い男（前書き）

恒例行事です。

赤い男

この地について情報が欲しかったネロは今から町に行くという劉備達に同行することにしたのだが…。

「ネロお兄ちゃんは背が高いから遠くまでよく見えるのだ！凄いだー！」

「鈴々！初対面の男性に肩車など失礼にも程があるぞ！ああ、ネロさん申し訳ありません！」

「髪を引っ張らないようにしてもらえると、ありがたいんだがな…」

「鈴々ちゃんよかったね♪」

「桃香様も笑ってないで止めてください！」

「愛紗お姉ちゃんが嫉妬は見苦しいのだ〜！」

「しししっ、嫉妬などしてない！！！！／／／／」

「D a m n i t…（どうにでもなれ）」

美少女が両脇にいる正に両手に花、さらに頭に美少女という普通なら超がつくほど羨ましい状況なのだが、閉鎖的なフォルトウナで育ったネロはこの慣れない、姦しさに少々…いや、かなり精神的にまわっていた。

「ハア…（女難はアンタの役目だろうがオッサン）」

深い溜め息を吐きながらネロが心の中で愚痴ていると、肩車されていた張飛が突然騒ぎだした。

「大変なのだ！真っ赤な服を着た男の人が賊に襲われてるのだ！！」

「ほっとけ、真っ赤な服の男なんて間違いなく頭がイカれてる無視しとけ（この状況でアイツにあったらストレスで胃に穴が空きそうだ）」

「ネロお兄ちゃんは腰抜けなのだ！見損なったのだ！」

張飛はネロに怒鳴ると頭から飛び降り走っていった。

「鈴々の言う通りです！力無き人が襲われてるのに心は痛まないんですか！貴方には失望しました！！」

関羽は顔に露骨に怒りを浮かべながら、急いで張飛の後を追った。

「襲われてる人が目の前にいるのにほっとけだなんて酷いです！たしかに乱世では力の無い人が悪いって言う人もいます、でも…」
劉備は僅かに目に怒りの意思を込めながらネロに詰め寄る。

「わかった、俺も行けばいいんだろ…ハア」

ネロはガツクリと項垂れ、この世界に来てから何回目になるか解らない大きな溜め息を吐いた後に言葉を続けた。

「荒野のド真ん中に女をたった一人で置き去りにするなんて出来ないしな」

「えっ！？あははは…」

劉備は回りをキョロキョロ見回して自分が一人取り残されたことに

気付き、気まずそうに笑った。

「張飛達に追い付く、悪いな劉備、少し…跳ばすぜッ！」
と言い終わると同時に劉備を抱え（所謂お姫様抱っこ）疾風の如くネロは駆け出した。

「何を！？えええええ！顔が近つ、でもネロさんならあんまり嫌じゃな…／＼／＼って、速い怖い降ろしてええええ！！！！」

異世界に着いて目が覚めて早々、ダンテはチビ・デブ・ノツポのチンピラ三人組に絡まれていた。

張飛が見たのは、ちょうどその時だった。

「かつ、金になりそうな物をよこすんだな！そしたら命だけは助けてやるんだな！」

「兄貴、その剣たぶんかなりの業物だぜ」

「俺達は黄巾党だ！命が惜しかったら（ry」

2メートル近い長身、鍛え上げられた肉体のダンテに多少ビビりながらも三人組は精一杯の虚勢をはる。

すると、ダンテは余裕の笑みを浮かべ素直にリベリオンを地面に突き刺す。

「持ってけよ、いいぜ」

「へっ、物分かりが良い野 r…重ッッ！チビ、デブ手伝え！」

「もっ、持ち上がらないんだな」

「んぎぎぎぎ！マジかよ…」

持ち上がらなかった…。

「いらないんなら返してもらおう、悪いな」そう言うときダンテは軽々とリベリオンを背中に担いだ。

「もう謝っても許さないんだな！！」

「ブッ殺してやる！！」

「こっちもスラムと大して変わらねえな。Hey! C'mon
inp! (来な、ノロマ野郎)」

ダンテはボクシングのシャドーをしながら挑発する。

「意味不明なこと言いやがって！三人同時に行くぞ！せーのっ！」

このあと三人の賊は張飛、関羽が到着する頃には既にボッコボコにされていた。

「燕人張飛ただいま参上！鈴々が来たからもう大丈夫なの…だ……」

「これはいったい…どういう…」

「Ha-ha! あんまり見つめるなよ照れるぜ、まっ！良い男だから仕方ないか」

「真面目に相手にするだけ無駄だ、やっぱりアンタか…ダンテ。降りな、劉備」

「あ、ありがとうございます…（顔が熱いよお）／／／」

「ネロさん（お兄ちゃん）の知り合いですか（なのだ）！？」

「忌々しい腐れ縁の同業者だ」

「さっきは酷いこと言っちゃってゴメンなのだ…」

「なぜ一言、私達に説明してくれなかったのですか！？」
やや厳しい口調で問いかける関羽であったが。

「説明する時間があったか？まあ、いいけどよ」

「も、申し訳ありません…」

ネロの話も聞かず、しかも劉備まで置いて飛び出してしまったことを思いだし正にグウの音もでない。

「鈴々ちゃんも、愛紗ちゃんもあんまり落ち込んでたらネロさんが困っちゃうよ♪」

「愛紗って嬢ちゃんが困ってるぜ、おっと！」

「貴ッ様あああ！！許さん！！！！！！」

ガキイイイン

真名を言われて激昂した関羽の一撃をダンテはいつの間にか片手に持ったりベリオンで防ぐ。

「H a－h a！なににキレてるかはしらないが、最ッ高だ！危険な女は嫌いじゃない」

「どうして…どうして、あの人は愛紗ちゃんの真名を呼んだんですか！」

「ああ、アイツも今日ここに着いたばっかだからな真名のことなんて何も知らないな」

「愛紗ちゃん落ち着いて！鈴々ちゃん！ネロさん！愛紗ちゃんを止めて！…鈴々ちゃん？」

「ほっとけ、剣で刺したくらいじゃ死なねえよアイツは」

「スパーダ…あのオジサンの持つてる骸骨の剣、絵本で見たのと同じなのだ…オジサンはきつとスパーダなのだ！」

「H e y！お嬢ちゃん俺はイカしたお兄さんだ！それと生憎、親父は親父じゃない、ダンテだ。ところで坊や、なんで黒髪の嬢ちゃんが怒ってるのか教えてくれよ！可愛い娘に嫌われたままじゃ寝付きが悪いんでね！発音が違ったか？」

「親父って…スパーダはダンテさんの…お父さ…ん！？」

劉備は開いた口が塞がらなかった。

ビュン！ビュン！ブオン！

関羽から繰り出される青龍円月刀から繰り出される嵐のような斬激

は全て虚しく空を斬る。

「アンタが読んじまったのは真名ってやつで、本人が許した相手以外が勝手に読んだらブツ殺されても文句言えないくらいに失礼になるんだってよ、イカれたオッサン」

「アー、なるほど…嬢ちゃんが怒るのも当然ってわけか」

「ハアアアアア！！（この人は私ごとときでは想像も及ばないほどに強い…しかし、せめて一太刀！全てをこの一撃に！！）」

その関羽の全身全霊の一撃は恐ろしいほど呆気なく
ダンテの体を貫いた…。

赤い男（後書き）

いやゝ、戦闘描写…難しいですね。

ポリシーは女子供には優しく（前書き）

無駄に長くなってしまった…。

若干…むしろかなりキャラ崩壊してます。

「こっちに來て早々、可愛いBabyちゃん三人とデートなんてなかなかやるな。キリエの嬢ちゃんも苦勞す「違う」冗談だ、ムキになるなよ」

ネロがこめかみに青筋を浮かべながらレッドクイーンに手をかけると、ダンテはまいったといった様子で肩を竦めた。

「H a h a ! 俺だけ仲間はずれなんて水臭いぜ、坊や！俺はダンテ、“ Devil May Cry ” って便利屋をやってる！よろしく、お姫様」

ダンテは軽く自己紹介すると劉備たちにウィンクした。

「貴様！化生の類いか！逃げてください桃香様！鈴々！桃香様を守れ！」

「惜しいな、半分正解だ。正確には半人半魔、悪魔と人間のハーフ」

「はーふ？」

「悪魔の親父と人間の母さんとの間に生まれた間の子ってことさ」

「悪魔だと！人を謀るのもいいかげんに！えっ、なんですか桃香様？」

「愛紗ちゃん、落ち着いて…聞いて。その人は…ゴニョゴニョ」

「見慣れぬ異国の服…骸骨の…剣…魔剣士スパードは…悪魔でありながら…人間の見方…息子…なら私は…まさか…そんな…予言の…」

劉備の話を聞いた関羽はどんどん顔が真っ青になっていく。

関羽が顔面蒼白を青ざめ肩を震わせるなかダンテは張飛をからかって遊んでいた。

「ダンテおじちゃんのお父さんがスパイダなら、おじちゃんも魔劍士なのだ？」

「親父と兄貴は魔劍士だったが俺は銃を使うから正確には魔劍士じゃねえな。それと俺はまだ、おじちゃんなんて呼ばれる歳じゃないぜ、小さなお姫様」

そういうとダンテは芝居がかった大袈裟な礼をする。

「鈴々は小さくないのだ！鈴々は姓は張、名は飛、字は翼徳って名前があるのだ！」

「そいつは悪かった、よろしくな」

「ダンテお兄ちゃん、兄さん、兄者…ピッタリこないのだ…」

「呼び捨てでいいぜ、張飛」

「じゃあ、鈴々はダンテって呼ぶのだ！ところでその鉄の筒はなんなのだ？ネロお兄ちゃんもそんなの持ってたのだ。鈴々、気になるのだ」

「どういふことだ、坊や？」

「ここは俺達の世界とは違うみたいだが大昔の中国、銃が発明される前なんだろう」

「なるほど…これは銃っていう武器でな、ガキが持つには早すぎる。もっと安全なのをお姉ちゃんに買ってもらいな」

「鈴々はガキじゃないのだー！怒ったのだ！避けるなのだ！！」
張飛は顔を真っ赤にして蛇矛をブンブン振り回すが全て…空振りした。

「H a — h a ! おっかねえ姫さんだ、機嫌直してくれよ」

そんなこんなでダンテと張飛はすっかり仲良く(?) なっていた。
そんなこんなでダンテの誤解は解け、互いに改めて自己紹介をした。

「申し訳ございません…魔剣士様に斬りかかるなど言語道断、弁明の余地ありません」

関羽は肩をワナワナと震わせ土下座した。

「美人に涙は似合わない可愛い顔が台無しだ、それに次に踊るならベッドの中にしようぜ」

ダンテは全く気にしていないという様子でウィンクをして答えた。

「びっ、びび美女などとお戯れはよしてください…わたしのような武骨者など…／＼／」

関羽は真っ赤になった。

「ところで、この世界でのスパード伝説、それと予言のことを教えてくれ」

ダンテは初めて真剣な顔をして劉備に訪ねる。

「はっ、はい。まず悪魔でありながら正義の心に目覚めた魔剣士ス

パーダは…」

少し緊張した様子で劉備が話し始めたスパードの伝説は、ダンテやネロが知っているものと時代や時期に若干の誤差があるものの似通っていた。

「まったく、別の世界まで来て親父の尻拭いとは泣けてくるぜ…」

「別の世界ってなんなのだ？」

「俺でもよくわかんねえな。まっ、そこで俺と坊やはこの世界を救うって依頼を受けちゃったのさ」

「ダンテさん…ううん、ご主人様！」

「おいおい、俺にそんな呼ばれ方されて喜ぶ趣味はないぜ」

「私達に力を貸してください…!!」

劉備は強い決意を内に秘めた瞳でダンテを見る。

「まっ、美女の頼みだ。内容次第だな」

「戦えない、力なき人たちを守るために…。力があるからって好き放題暴れて、人のことを考えない悪魔みたいなやつらをこらしめるために！みんなが笑って暮らせる世のために！」

そう言って劉備が頭を下げると、関羽、張飛も頭を下げた。

「アー…、悪いが断る。悪魔なら大歓迎なんだが人間同士の戦争なんて興味なくてね。まっ、気が向いたら手伝ってやる（憎しみの集まる戦場なんかには悪魔は集まりやすいしな）」

「そう…ですか…」

断られた三人はションボリしている。

「そこにスパイダの血をひく騎士様がいるんだ、そっちに頼みな」

「「「えっ!?!」」」

「おいっ…、勝手に話を進めんじゃねえよ」

「右手も閻魔刀も見せてないだろ、見せてからの反応で決めたらどうだ？」

「Fuck! (クソつたれ)」

ネロは眉間に深い皺を浮かべてギブスを右手のギブスを外した。

現れたのは人の物とは思えない悪魔の右手。

そして右手から“閻魔刀”を取り出した。

「「「……………」」」

一瞬の沈黙。

それを破ったのは張飛だった。

「かつ、格好いいのだ! 鈴々もそれほしいのだ!!」

「その右手ってなんでも入るんですか? 私よく物なくすからあったら便利かな」

テンション上がりまくりの二人。

関羽は

「防具として使い勝手がよさそうな…それより、あの剣かなりの業

物の…」

自分の世界に入りブツブツ呟いていた。

「…怖くないのか？」

ネロの予想の遥か斜め上をいく反応に呆氣にとられていた。

「「「なにが（ですか・なのだ）？」」」

「ネロさんはちょっと怖いけど優しいし。ネロさんはネロさんだよ
♪あっ、いけないご主人様っていわなきゃ！」

「ご主人様は絶対に却下、全力で拒否する。ネロでいい」

「H a — h a ! モテモテだな坊や！」

「黙ってろ！」

「えっと改めて私の真名は」

「とりあえず町についてから話そうぜ…」
心底疲れたといった表情でネロが呟く。

「「「あっ……」」」

三人は町に行くことをすっかり忘れていた。

ポリシーは女子供には優しく（後書き）

なかなか話がすすまないです、はあ…。

ダンテの魔具もどんどん使っていきたいんですけどね。
やっぱり文を書くのって難しい。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9898x/>

恋姫無双～外史に降り立った悪魔狩人～

2011年11月4日11時14分発行